特67
409

№8910

附人替名

お種か池神經實いお岸瀬　橘三郎
中田禎
安積廉之助實ハおきし　仲間廉平　時田浅人　荒五郎
増田政一　高田安積廉之助　花井隼人　藤野直　福圓
藝妓おふみ　寶ハ　興八　齋藤おくら

りやうし重平　秋生主水次　染井女房おなみ　政一方の姉おはな　重左衛門妻おとよ　長助妻およし　政一郎男　梅之助　紫琴

りやうし源太　村上隼太　仲間幸助　玉谷左衛門　曲瀬庄軍司　岩崎山三　こしもと女中お小政　藝妓お竹　渡邊鎮雄　岡崎敬右衛門　大政時　吉田一郎　三郎　時田半之亟　多久見蕃六郎　豐田武種之介　矢村政次郎　宗之進　藝妓お由　宗みつ

曲瀬主馬太郎　小性右門　曲上瀬軍太夫　松村掛兵衛　佐十郎　津吉三郎　かるた宗十郎

此外相中大部家の役割は畧致し候
故本番附に就て御覽下さり候やう
願候

序幕白滝明神社内女夫杉の場　造物平舞臺うしろ一面の淺黄幕上下とも石の玉垣梅の釣枝上手莫大成女夫杉の立樹尤注連を張繪馬を澤山取附縁結びの紙數多結付あり下手茶見世百性四人仕出しにて臺拍子よりて幕明く

今日は元日よりて此白滝明神様が恵方より當る故皆参詣に來升たゞ茶店の婆々と咄し近頃は世間が騒しく蕎の外は見た事のない唐人は見た又は蕭星は出し三月節句毋雪が降る中で御大老が首を切られる抔はんよ錢もふけのない六ゝしい世の中ではないあいノウ其不景氣な世の中ゝふしぎと云は今里村の庄左衛門ジャあいつの親の代迄は水呑百性よて正月が來たとて羽織一枚なのつた者が悴の代よなりてから月増し日増しよ金が出來今では今里の庄家を勤め大へいな面をさらして居れと咄しを聞たよは小便買よ歩行よも其取替る大根は毎朝人より早く起人の畑に作ッたる野菜物を盗み大小便と替へるのじやげな此事は誰も知すと居けれど天知地知で終ゝ人の噂と成今では大根長者といへば誰知ぬ者はないト此筋を云件有て爰へ庄左衛門立聞して居て大服立する件より百性皆々又聞の咄しを申升た事もへお免しなされて被下升せト皆々は入跡庄左衛門此事は誰も知るまゝと思ふて居ゝふしぎよ能知て居やがるイヤ不思議と云ばお種が池ジャ往古からあの池ゝはぬしが住と聞ては居れぞれとゝいの夜又夕部と二十両三十両と小判で幸福をお授け被下れるは此庄左衛門の信心が通じて神のれ恵みと思へばドウゾ今夜も五十両程拾ふ積りの恵方参り早ふ日が暮るればよいがナアト是を鳥追唄臺拍子よ成て向ふよりお政文金助田振袖の着附侍女の拵へ廉平紺看板仲間の拵へゝて付添出で來り廉平（鶴助）お政（うめる）花道ゝて一寸臺詞有て庄左衛門と顔見合し茶店の番を廉平に頼み庄左衛門は入別廉平お政に曲瀬軍太夫の弟軍司の艶書を出し色〳〵有てれ政どの色よい返事を仕て上て被下と艶書を出政（うめる）何慇しきれ政どの参る軍司よりと謂恂てして投棄エ、モ是は艶書ではムンせぬういナァ廉平いかゝも艶書サ然もこなたの奉公先の若且那様ゝら屆けて呉と頼まれた此手紙れ政（うめる）しらぬわいナアトつん〳〵はね退うしろへは入廉平追ゝけ行引ちがへれ政出來りアゝモ五月蠅アノ軍司面八こう知ね私しよは菖田半之亟様とゝふ末を約せしれ方の有身夫故早ふ女夫ゝ成たいと惠方参りゝ事密て爰る來のは白滝の明神様へ願ひでなく願ふ所は女夫杉此御神木へ祈願を掛れば必思ふ殿御と女夫になれると云事を聞て居る故お頼み申よ來者とも知ずアタいやらしい慇の取持憚りながら私しには定まる夫がムんそわいナア其女夫に成れるやう人の見ぬ間にちつとも早ふそふじや〳〵と結び紙を出し杉の枝よ結び附け拜み居爰へ歌役四人出ヲ、そこゝ居るは曲瀬どの、腰元お政どのではなゝか何をして居る是サお政どの政（うめる）恂りして是は〳〵どなたさまもよふれ参り被成升た（歌役）ナニれ政女夫杉ゝ願込するは誰ぞ思わゝの男と縁結びジャナ（政）イエ〳〵決してそんな事ではムンせぬ鼻緒をなはして居升たのでムそといろ〳〵言譯してドゝれ使が急ぎ升ると鳥追臺拍子よて足早にはいる（歌役）何といづれも一家中で器量よしと評判のあのれ政相手は誰か彼れが結んだ紙を見んと開き見てヨウ名前れ菖田半之亟扨ゝ我々とは持論の合ぬ多人見黨の一人アノ半之亟で有たるかト思入爰へ廉平甲軍司の一件を咄す件を皆々軍司どのが懇去たふともダメだ其証據は此結び紙に書附し半之亟と謂が有ゝへ尚又我黨の秘密を反對黨の半之亟へ内通なさんも斗られずと此由生田どのへ注意せんとゝふ件ゝて皆々向へは入跡知らせ有て道具返し

同れ種ケ池神託の場　奥中壹間の高二重三方岩組の蹴込左右へなだれし岩屈遠山を見さる古池闇夜の書割物凄き飾り附都而れ種ケ池夜のもやう風の音よて道具納るト直ゝ鳴物を打揚大サッマゝ成る「それ怪力亂神は語らずといへども奇異不思議のなきよもあらずされば此程れ種ケ池ゝ年經る主の所爲成けん禍を授る事有と歩みを運ぶ夜の風は淙々として聲をなし汀を洗ふ漣の音に聞へし古沼の夜はいとゝ猶物凄しト此時橋掛りよて蛇之助（　）エ、打ちやつて置きやアがれ誰だと思ふ蛇之助様だト是を神の勅ゝ成て非人の形り酒よ酔て居るこなし以前の庄左衛門付添捨せりふよて出來り（庄）是いしたりあぶないわい早ふ小家へ往て寐ひと云にと段々叱り附早ふいねと中せよ（蛇）〜イ〳〵いね升さい槌束ねのしれ笹をうたげて千鳥足か面白〳〵ト上手へは入（庄）アハ、正月は有ふ者じや非人迄がゑらい元氣じやわいイヤ其元氣といへば今の唄で思ゐ出したが此池じや二夜つゞけて拾ふた小判今夜も又拾ふ積りで暮れるを待つて出て來たが拾ふ所を慥よ此邊小判はどこジャれ金は何所ジャトいろ〳〵探しれかしみ有此時岩屋の内よりれ岸（橘三郎）庄左衛門ト呼（庄）恂りなしエ、誰ジャれれが名を呼え（岸）庄左衛門（庄）アレ又呼んで居る誰ジャ何所からジャト邊りを見廻ゝ此時岩屋の黒幕を落し内よりお岸龍頭寶冠を頂龍女の拵へよて立身に居（岸）汝を呼しは自なるゞ（庄）見て恂りなしうづくまり慇ゐ居る（岸）イヤノウ恐るゝ事なかれ自事は天照の大神の神勅を蒙つゝ此池に住龍神なりソモ近頃ゝ愚民ども目前の利に走り池を埋立野菜の類ひを培養せんゝ次第に邪住居所を狭められ終に住へき一酌の水さへ尽きぬ可しと長詞臺有て自らが心を汲ゝと庄左衛門（庄）コハ合点行かぬは其神勅左迄慥しと思召ばなゝ此池を埋立し百性共に罰を與へ目に物を見せてゝやらつしやり升ぬ

ぞ(岸)愚なり庄左衛門ト樂入了成たとへ愚民の爲業なりとも是皆國主の命を得て行ふ者なれば只私の恨みを以て災を成下さんやト是とり汝の爲志を感に両度まで福を授々今又汝が奥庭乃池を底淺からず名水なれば我住む所となさん爲是なる黄金を與へ其邊へ祠宇造り玆三月の内風雨烈しき夜乃あらば我遷座乃時と知り家内乃者ども一問りとも能必外を伺ふ可らず我詞背犯もに於ても幸忽ち不側乃災を成下せ可しもめ疑ふことなかれ(庄)ゑつそふな神慮ゑ叶わぬ事なれば決して外を覗さも致し升せぬ(岸)夫れぞ雨風烈しき夜を待て然らば玉谷庄左衛門(庄)左やうならば○コリヤかうしても居られぬもいト早い相方に成りうろたへこけつ轉びつ向へ走りも入跡相方成消お岸遊りを見廻しながら本釣鐘にて呼子笛成吹增田政一着流し大小浪士の拵へにて頭巾成冠り出能所にてお岸をすかし見て政一(橘三郎)お岸の(岸)モシト押へる竹笛入相方にて(政)シテ首尾をいかゝで有た(岸)仰の通り事を謀りまんまと首尾とく庄左衛門を(政)今我爲所も私欲乃爲乃賊に非ぜ天に替つて不義をこらせ正義乃黨乃費用に宛ん志(岸)彼れが所有乃金銀財寶奪お取るも(政)銀山にて乃敗を取し(岸)恥辱を雪ぐ義兵乃旗上ゲ(政)尽せ所も御國乃爲(岸)人目にのゝらぬ其内に(政)今宵は一先武德山へ片時も早ふ(岸)政一ど乃(政)ね岸來やれト此以前より蒔田半之亟嵩羽

の御出座と呼皆々ハアヽト是にて時計の音にて幕明久敬政(吉三郎)何れも出仕太義に思ふぞ皆々ハヽハアヽ(敬政)今日其方等出仕や附しも余の義にあらず今度今里村玉谷庄左衛門方を襲お し賊有し旨訴へに依而夫レ〳〵吟味をとげし所今に行衛知れざるよしトいろ〳〵有て其賊徒追捕の義其方等の意見を承らん(皆々)ハアヽ(敬政)や立よ(軍太夫)ハアヽ君の仰せ也尤に厶り升る其義に付て庄左衛門訴へ出し其日より日夜探索仕れども今以手懸りを得ず賊徒の内一人の女相加もりこやつれ種が池の神靈と偽り(彌太郎)風雨烈しき夜を約して彼れが宅乃池に舍りト渡り臺詞になり四棟の土藏を盡く破り金銀財寶衣類まで奪去りト此節を云此上ゑ領地の山々殘りなく吟味致さば相わるらふかと存升る(敬政)何樣其方等の申所も尤には思へども主水水の意見も承りたしシテ主水いかゝなせしヲ(軍太夫)いまだ登城(皆々)致され升せぬト此時向ふにて主水(荒五郎)アイヤ生田主水忠澄只今夫へト繼上下の拵らへにて出花道にて平伏もる(敬政)ヲヽ待兼し生田主水ト是より彼の强賊の義について(主水)アイヤ其義は只今お次より承しトいろ〳〵有て此義は多久見殿に問合さば粗相わからんといふ件より正義黨ト言葉咎の議論有所へ多久見藩六郎(宗十郎)アイヤ何れも騒きあるな多久見藩六郎種次夫へ參つて直々承り申で厶らふト繼上下にて出

繼まち高杯武張た拵へにて手丸提灯成袖に隱し伺おながら出て來り半之亟(宗十郎)曲者待ヲ(政)南無三大事を(岸)聞れし樣子(半)アイヤ必早まられな增田政一ど乃(政)ヤ何と誠に貴殿ゑ蒔田氏ト是とり三人國事に身命を捨て誠を尽さん事を述又蒔田も藩論二派に別れ生田主水巨魁と成佐幕論を主張し又正義を守る我黨にゑ多久見種次どもを泰斗と仰ぎ居るなれば貴殿も同志乃事なれば折を見合せ多久見ども、屋敷まで(政)いづれ推參仕舛ふ(蒔)先夫れ迄ゑ(政)いふ可事も(岸)聞可事も(蒔)再會乃時に讓りヤて(岸)今宵ゑ此儘いわぜ語らぜ(蒔)ゑ別れヤさん御夫婦方此以前より蛇之助何お出うぬ泥ぼうめ(お岸)百筋を取て引附け(岸)此野おせりも生して置ば(蒔)勞して功なき(岸)今宵乃一條(政)不便ながらもト切らんとする此時上手芦原乃影より雀澤山飛去る是に三人惝りなし(三人)察ぐらを立し數多乃雀ゑト政一蛇之助を捕へし手を思わず放ゑ上手芦原より重平次鉄砲を持出る蛇之助をかし見て(蛇)泥坊ゑト大きくいふ重平次此聲を的に火蓋を切る両花道乃三人驚き下に居るが木偶蛇之助血を吐倒れる(重)ゑ鉄砲を突て向ふを見送るさくりにて両花道向へ行乃が三重にておやうし幕

二幕目　殿中大廣間議論の場造り物通り途がまち半籠をかけ引手房附の金襖都而敬政公館大廣間の体幕の内より諸士大勢我君

（多久見）コハ聞ク絶ヘざる貴殿のお詞今や各藩尊王愛國の義士輩出致たは何が故と思召一ヨ幕政刺撃の反動とはヤながら其の源を尋ぬれば天地間の眞理即天命の歸する所なり然して其徒が爭ふて亡命浮浪の客と成るは是亦原因のなきにあらず此義は譯而我君ゥもお聞の程を願ひたしそも各地の諸侯治平ヲ馴れ其要とする所は下に臨むヲ背嚴を以てし自ら所をるヲ燕安を事となを故に家老又は用人等の其内ヲもたま〳〵天命の歸風潮の趣きを知る者もなきヨあらぬ共只家柄を頼みとして俸祿を貪ヲ公を後ヨして私を先になし因循一時の覩ヲふけり務めて君聽の聰を覆わんとをるが下情は上に通ぜずして上意亦下に達せず稀に是を諫むる士有て君ヲ說をなをも上を憚らず蔑に致をと怒れば家老用人其尻に付仰せに違ふ者と咎む夫を理有とをる者あれば幕府の脈制もるうせならず禁錮入牢甚敷は遠嶋死刑の刻刑等不側の難ヨ逢ふ者多し故ヨ心ある者は空しく下和の玉を抱いて長久恨みを呑んヨ寧ろ主從の緣故を斷ても國の爲公衆の爲に王臣の職を全ふなさんと終ヨ其藩を亡命し輕て事を成さんづと有志の精神苟しくも我日本男子ヨして志有者は誰もあくこゝ有度者では厶らぬゝ〇分て當家の御先祖は御家柄にゝへば我藩こそ他家ヨぬきんで勤王の意を表をべきヨ返つて長藩に先じられをはイト口惜しき事ヨこそ然るに主水殿ヨは假令ヨも老臣の職ヨ有ながら是等を我君ヨ勸め奉る事もなく返つて忠臣義士を指賊と呼わり剩さゑ今里村の盜賊も我輩と同感の壯士が仕業と是を見なし此種次が存しやうヨ仰せ有しは何ゾ貴殿證據有つての義で厶るか（主水）證據とては厶らねど近頃所々ヨ押入賊は多く勤王を名ヤする故大方貴殿御存じと思ふ拙者が想像論別ヨ斷言は仕らぬ（多久見）スリヤ只今のお詞は想像なりと仰せらるゝの（諸士）たとへ虛證實證たりとも君聞こし召るゝ御前ヨ於て△務めて國家の面目を〇一新せんと斗る正義の□有志を蹂るお詞×我々聞流しヨは（皆々）相成ヤさぬ（軍太夫）ヤア今日の此席は勤王非勤王の事を論ずる席上と思わるゝの今里村盜賊詮義の命こそ有ト相方意氣込爰へ中田禎藏（橘三郎）アイヤ何れも暫く〳〵と云ながら麻上下武張た拵らへ一眼にエッカ〳〵と出來暫くお待下さり升ふト是よりかやうの議論より一家中の不和を生じお家の大事を引出すものヨ厶りまをれば此賊の追捕は拙者ヨ仰附られたしヤ主水藩六郎両人も追捕の命を蒙たしと爭ぬ件よりトゝ禎藏追捕の命を蒙り双方家の爲國の爲を思ぬ忠義の志敬政過分ヨ思ふヤト双方ヨ意恨なきやう両人の說は予爲ト勤考の上沙汰ヨ及ぶトいふ件ヨて時の太鼓ヨて皆々え入跡（敬政）コリヤ短冊を持エト和歌を認め遣わを（禎藏）無筆の思入ヨて面目次第も厶り升ぬ（敬政）今より手習ト短冊を禎藏の前へ投ゆるのが木の頭致してヨ讀をト此摸やうよろしく早舞ヨて返し生田主水邸密談の場　見附床の間銀襖都而生田屋敷の体爰ヨ軍太夫軍司來り御前に於て今日の評定は勤王論を信じ長州と合体なを幕府へ弓を引んヤいふ評定と思の外今里村の賊の義故夫をおとりヨ多久見黨を罪に落さんと余程議論に及ばれをがと前の件を話し是より多久見黨は今晩より忍び〳〵ヨ賊の行衛を搜ヤは必定其跡を附彼等の首級を引提歸らば多久見黨の肝をおをぎ自然佐幕論に傾かんを兩人爰を立出れ件にて跡へ腰元お政立聞をてヲモ恐ろをいト（主水）悔りをてヤアろふ云ろはお政でないあヤ（お政）今奮母の急病もへ宿元までいなを て呉と願ぬ（主水）扨は其方何ゾ聞たか（お政）イヽヱ何事も（主水）聞ぬとヤかトいろ〳〵有て暇を遣る件とり（軍司）彼れは多久見黨の一人蒔田と譯有る故此事内通をるヨ於てはゆゝしき大事ト（主水）サスレばいつをト思入にて切て仕舞へと（軍司）殺い余ヨト言ふを（主水）千丈の堤も蟻の一穴ト押へるが道具替りの知らせヨて返し

多久見蕃六郎密謀の場　多久見邸の体ヲて蒔田半之亟と程能住居多久見スリヤ蒔田氏何といわれゝ先達而今里村の賊は主家の舊臣增田兵衛の悴政一の所爲で厶つたか蒔田イカにも當元日お種が池の汀にてと序幕の筋を述へる（多久見）何さま增田政一は亡父兵衛とり勤王家にて頗れ愛國尽忠の壯士なれば左もあれべき事既に此賊を追捕の役目を願ふて捕らへんと思ひし賊が政一とい始て知つたれ貴殿の詞蒔田スリヤ今日の評定は其義で厶つたか（多久見）主水ヨは其賊を我黨の說を唱へれ者の仕業ヤ張ヤ我黨を罪ヨ落さん彼が心中夫レ故此奥名を清めねばト既ヨ彼の賊を捕出さん事同志共トヤ合せたるが蒔田自然益田を主水の手へ捕へられなば奸徒原が計略ヲ落らん多久見氏能御賢慮は厶れまいこの此時大藏新太郎出來り只今廉平が一大事を通せんと來れト云件有て廉平出元下郎めは賤しい身分では厶り升れど常に朝廷を蔑しろにする幕府の仕業が憎さ故十年前に國を飛出し勤王家といふお人ヨ聽ふヤ國の爲及ばずながら力を尽を國民の義務とやらを立てんとのなた樣方ヨ心服れ咄し申升た所がけなげなやつヤ生田屋敷へ住込んて機密を探れと仰せ受居升た所が今夜あなた方がてつきり賊を捕らへんとお種が池神代川小耶广東光赤間津邊を探索すれに違ひない故へ跡を附廻りだまし打に仕やうと言比興未練な談合聞ヤ等しく其事をれ知らせ申に參り升た右の譯故今夜ヨら何殿にも御用心被成升ヤト是より多久見は生田が持論の佐幕說を主張なし一藩の方向を定めんと扨こそ比興の振舞を致ヤ者ヤ推察せりイヲ此上ハ彼れが裏をうら此方より討てくれん（蒔田）奸徒原を天誅ヨ行わんヤいふ貴殿が御心

体(多久見)主事ヨ勤れ正義の刀はト刀掛の刃を取れ(蒔田)皇國を静むれ天の村雲(大蔵)たゝへていわゝさばくゐす(新太郎)厄神天魔に等しき奴原(多久見)何手に立うやト皆々刀の目釘をしめす康平嬉しき思入此摸様よろゝく相方に返ス

神代川堤暴行の場　うゝろ黒幕戴壘石の地蔵尊松の立樹都而神代川堤夜の体木魚入相方ヨて道具納るれ政出來り早ふ半之亟様に此事をれしらせ申て上たいト此裏道を來れが此堤は淋ゝい事では有わいナアト戸家の内より(軍司)ヲヽイれ政〳〵ト呼(れ政)どうやら私を呼様子(軍司)ヲヽイお政待テゝいふヨ是お政(政)シテ私をれ呼被成れたゐなた様は(軍司)誰でもゐい曲瀬軍司身共ジャヤわい(政)ヤ軍司様かト上手へ逃かけるを(軍司)コレお政此軍司と見て逃るのは何が夫程こわい此軍司鬼でも蛇でもないわいヤイト是より獨り歸るも夜中故宿まで送て遣はさうと是まで參つた曲瀬軍司何と心中者で有うがなトいろ〳〵有てトゝ口説ども聞入れぬ故半之亟と諍有故ならんさればモウ此上は御家老の言附通り機密を告げに行汝此刀で冥途の旅へ送つて遣るもト立廻りに成爰へ以前より安積廉之助前髪うしろ茶筌巻經袴大小深編笠鉄扇ヲ持浪士の拵らへりで伺おッカ〳〵と前へ出軍司を究退れ政を圖ゐ急度思入有て(廉之助)コリヤ婦人を取らへ何と致ゞ軍司ヤ思ゐがけない政よい所へれ武家様ゐ助け被成て下さゞ升せ(廉之助)某が目ヨ懸つゝしからゝいかで救で置可きや(軍司)ヤア仔細有て一命助け置れぬ其女さまたげ致せし其方は(廉之助)某事は天下の浪士安積廉之助といへる者面体見知て置れよト編笠を取る軍司ヤアたゝへ浪人仕官の身たり共邪ア致さば用捨はナイゾ(廉之助)ヤア小さがしき其一言事の子細は只今聞たト是とり軍司切てかゝるを廉之助身をうわし輝の勢に成暗がりの立廻りて道具返し

荒神の森梟首の場　荒れたる祠にて都而荒神の森夜の体時の鐘風の音にて道具納る爰へ吉田大蔵の後を附軍太夫來る其後より又半之亟悦出大蔵を切懸る是太夫を見事に首打落ゑ又新太郎の後を附彌太郎來る是れも半之亟一刃り切倒ゑ爰へ祠の内とり多久見出如何でムッた(半之亟)計客正に圖をはずさず首に致して マッ此通り(多久見)がんどうの灯りて見る事有て(三人)シテ此首級は(多久見)夫成る杉の下枝へもといりく〳〵つて梟木ヲ(半之亟)心得ヤたりく〳〵り附る多久見杉の皮を削り天誅奸黨奸人曲瀬軍太夫早見彌太郎の首ト書正義の仇國家ヱ罪人是ヲ彼等へ能見せしれト上下より正義黨殘らず出來り皆々マンまゝ首尾よゝ多久見ハテ心地をきト首を見て肩で笑ふのが木の頭番六郎服の内にて笑ふこなし是をキザミにて幕

三幕目　加留の浦土器操練の場　造物黒塀三尺の開き松梅柳の梢を見せ舞臺花道殘らず雪布都而加留の浦染井宅裏手の体陣太鼓ばら貝ヨてアリヤ〳〵の聲ヨて幕明く爰ヲ今日の操練見ものじや土器操練といふて黒と黄の鉢巻ヨ土器を頂き敵と味方乃印ヨなし負勝が附のジャといふ件有て操練の摸やうを見せ此道具返になる

染井重右衛門住居小座敷ヲて庭廻物數寄の体爰に前幕の廉之助重右衛門娘ゐ政振袖娘の拵へヨて留て居るもやうヨて早めの相方ヨて道具納る(れ政)何を其やうにゐ支度を被成升るヲイのぶ(廉之助)サア只今乃ばちの音太鼓八方ヨ鯨波の起りしは慥に此身の(政)ェヽ(廉之助)イヤサ慥ヨ口(事ならざれば(政)何を仰せ被成升るやらアリヤ調練の聲でムり升る(廉)調練とはト是より今日は御領主様乃武藝始乃調練で有るといふ件有て母れ倉出來り娘の爲ヨは命の親といふ事有て夫ンとり娘の懸幕ふも無理ではないと婿ヨなつて呉と頼む娘はそムでない私しにて半之亟さんといふ人が有ると思入いろ〳〵有て(廉之助)は斷りいへども母い一途に娘が懸人と思ひサアといとゝなア此母が皆承知ジャと是ヨて両人心々ゝ迷惑の思入トい二階の見時よゝ調練を見物せよゝいふ件にて道具返し

以前の塀外ヨなる爰に佐幕黨の聚　半之亟一人を取巻土器を碎かれしにもかゝわらず無法のふるまいにて私の憤りを散さんとなす件爰へ吉田大蔵隊長の拵らへにて皆々を制し軍令に背くを咎ゑ蒔田乃手柄を賞し何れもには殿ヨりの御沙汰がムふト叱る件皆々は入跡蒔田は政一乃非常手段を行ひし一條にて長州へ發足をるを吉田に聞浦山しがる件にて別れる茲はお政乃宅の裏と氣の附長居は疑の原と行かけるを見て れた政出て留たる件よりトい内へ連込蒔田も行ふともる件有て終に塀の内へはいる跡獨吟ヨ成以前の小座敷此所てれ政は私に聖を貰へと母さんがいわさんす

以前の小座敷此所てれ政は私に聖を貰へと母さんがいわさんす

が半之亟様ドウ仕升しやうゾイナアト有る所ゑ母ゐ倉出二階にムる安積廉之助様が女夫にせよとのれ諭し(蒔田)何姓名さへも知らぬ人ヨ(廉之助)奥より外でもムらぬ蒔田氏ト(蒔田)未ダ一度も(廉)半之亟様姿形の替りし拙者私ハ増田政一のト邊りを見廻し女の思入にて妻の岸でムんをわツナナ三人ェヽト(蒔田)誠に過日お種が池ヨて夜分りお目ヨト(岸)アコレ(政爺)両人そんならアノお女中様でムり升るゥト是ゝゑお岸と両人を女夫ヨなを件より夫政一ヨれ逢なされしゥと問蒔田はいうヨも政一殿ハ長州へ發足致されしゥと答へる又岸はれ種が池乃吟味厳重なまよし故姿を替國元丹後へ立歸り十年後家出なせし兄の名を名乗しなり是は同名を疑ゐモシ兄が近邊に居れば廻り合ん手立ト云節有て再會を約し別れるのが返し

加留の磯敬政通行の場　此所都而調練場の体茲ゟ増田改一の弟政男が瀧中の子供共の造りし雪達磨を蹴欠しとて曲瀬主馬太郎を始め大勢輩ゟ叩き居る政男ハ麁粗もへといろ〳〵詫るを聞入れぬ所へ重平治(荒五郎)出來り双方をなだめ共ゟ詫れども承知せぬ故此坊様も親御は武士の果此腰の物が目には入らぬか何の虚言をいゝなさりよふト言子供ども武士の果と聞上ゟ首打代りに此刀分捕すると刀を取上ケ皆々向ふは入跡重平治政男追ひけ取戻しゟ行茲へ敬政引上の体にて通行成を兩八通り抜んと成茲ゟ敬政の目に留り其子細を尋ねられる事有て是より親増田兵衛の殿様拝領の刀ト大切ゟ爲今日の操練拝見にも兵衛同道ゟて拝見致を心ゟて帶せしを取上られしと恐る〳〵述るを敬政聞取兵衛殺も罪なくして永乃暇戍遣わせしは全く勤王説を唱へる[illegible]其兵衛も今は此世になき者なれば改而再勤をいゝ遣し大藏能に取手ちへと命じ政男ゟ今日の引出ゟト軍扇を遣し刃を返遣る爰を立腹らす跡敬政兵衛親子乃者共を感じる件ゟて返し

染井庭中雪中逃捕の場　好みの庭先座敷にて安積廉之助乃お岸手水鉢ゟて手を洗ひ居るト遣寄を打又もや操練の引上の太鼓ならんと驚さし氣戍替臥所へ入らんとなす所へ捕手出來り双方よりゆふる是よりいろ〳〵捕物の立廻り有て返し

築山泉水等の大道具にて廉之助大わらわゟて女らしき本手やうの立廻り夥多雪降らせ爰へ蒔田半之亟捕手に向ひ逃そふとなを運命盡たる此身とうしろへ手を廻すをトい此場を落し(蒔田)ちつとも早ふヤ探逃せしか残念なト相方ゟて廉之助手を合し拜む雪降らしらしろにてアヤ〳〵の聲早めの鳴物にてよろしくおやうし幕

四幕目今在家村獵師重平治内乃場　都而貧家乃体にて政一の母姉弟と三人傾重平治の厄介ゟ成居れ所重平治政男を連歸り今日加留の浦の一伍始終を語り程なく御歸参が叶ひ升ると皆々悦び居れ爰へ政一かげなから暇乞ゟ戻り歸参を不承知なりと心ならずも母姉へ悪口を附例の辛抱場でムり升ト い勘當請出かける所を重平治盗人待てと呼留め夫レとりれ種が池の一條を述べ其時此事外へ漏ざるやうと非人を一發の鉄砲にて打止しをわなだ様のお身を思ふて致せし此重平治をいろ〳〵異見の上今日染井の宅にてお種が池の賊の女房を蒔田が見逃せし疑にて正義黨乃人々は殘らず捕縛ゟ就ゟ事を聞しと語る是にて蒔田我ゆへ正義の人々に此疑をかけて言譯なしとかけ出をを母は呼止めさゝ前とりの其方の心底聞上ゟ國の爲に成事わつぱれ出來せし悴政一正義の人々へ言譯ゟ此母がまつ此如くと書置を出し自害をれ件より大義を抱きし其方茲かまわずと早〳〵長州へ加勢に參れと勇氣をゝげます摸やうにてよろしゝ幕

五幕目　蒔田邸門前歎願の場　爰へ染井の妻れ倉娘れ政蒔田が今日切腹と聞忍々ゟ爰へ來れ件有て跡へ中田禎藏上使と撿使を惹求れ蒔田ゟ其強窮をためさん爲鉄砲ゟて袖を打事有そこへ重平治老母乃書置持參して正義の人ゟは科ゟ厶り升せぬを歎願に來れを禎藏は我ゟ役目が違ふワイを取上ぬを渡さふとをゝるせり合ゟて禎藏無筆故上意書を歎願書取ちがへ内へは入是より蒔田切腹の場にて此歎願書を書置を蒔田ゟ讀件より禎藏も始てゝ夢のさめたれ如ゝ心を翻うへゝ蒔田に心靜かに切腹戍進ゟ蒔田の頼みに任せ書置戍殿御覽に入れれを約諾なを件有て介借なゝお政お倉重平治もいろ〳〵せりふ有此もやうしゝやうによろしく返ゝ

水心亭敬政遊宴の場　生田主水別壯水心亭の体にて國主敬政遊興の所愛妾お澤は主水の姪ゟて殿を放埒になし若殿を跡目になさん結携を見せる件にて禎藏わ前幕の書置戍をそかゝ殿へ奉れ事有れ爰へ多久見殿へ矢文を送れ夫より密かゝ目見へなし長州へ落れ件敬政は長州行の命令書を金子を遣わし爰を脱走さゝ件ゝてとろゝく幕

六幕目　田筈の浦村長勘兵衛邸の場　爰は多久見黨の難風ゝ逢ひ風待の所庄家の訴人ゝ依而出陣の生田主水の手とり軍司兵卒を引連多久見を始め正義黨の人々を打取り表は脱走人を討しといへども私の憤りを散んせしと悦ふ件ゝて返し

白田村多久見梟首の場　在体の遠見枯尾花の中ゝ獄門臺罪名の記せし捨札白田の町はづれ梟首の体爰へ政一出來ゟ我黨の正義の旁々廿人の出張との使ゝて廉平の來ゝし故忍び〳〵ゟ迎をゝ來りし所思をがけなき同黨の奸黨原ゝ討とられ其上梟首に成せゝ由ィデ某奪お取去らんと近よれゝと落ゝ穴へ落ちる軍司ゝレト出今里村の賊の張本召取たト押へ附縄をかける此もやうよろしくおやうゝ幕

大結　造り物本様附いつもの所に枝折門都而生田主水屋敷庭前の体時の太鼓ゟて幕明く

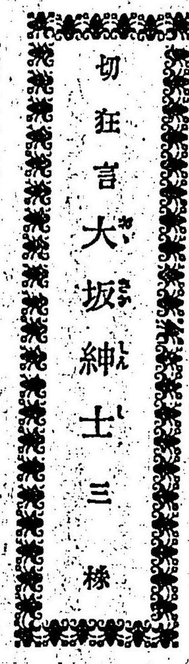
爰に前幕のれ涙やつれゝる姿へゝて細附ゝて住ふ近習大勢足輕共取卷今日は御家老様直々の御しらべ(主水)ム、強賊政一が姉涙其方が弟政一ゟた多久見等ト機密を迪し領内今里村庄屋玉谷庄左衛門方を襲お數多の金子を奪お し上長州へ脱走なゝ本藩を亂さんトなをふてきの曲者其兄弟なればヨモ存んせぬ事は有まいサア斯非常手段を行ひし其同類誰々成るや有体ゝ白狀いたせ

(涙)是ゝ又御家老様の御詞共存升ぬ私弟政一事は愛國尽忠の志深く身を捨て國事ゟほん走致す一個の壯士女如きの私に機密を漏をやうもなくたとへ此上いろやうにお尋ねムり升る共左ゝふ

な事は存ぜぬ(主水)いうな女ト是より政一も軍司が働きよて捕らへ今ごう問さい中愈以白狀致さぬに於てハ責殺しても拷問致スト牢内へ遣れ件よりなと日頃より反對黨ハ討取し上もはや政一の一類斗り是とても今暫しの内さ有時は敬政公を退隱させ若殿へ家督を願ふ本意を遂げるも眼の當りハテ心よさ事どもヨヤナア爰へお澤主馬太郎出來り兩人ッウヒやと自殺をる(主水)コリヤ兩人發狂なせ之か(澤)イエ〳〵狂氣は致し升せぬ命にかへて伯父上様へ(主馬)れ諫えヤト是より佐幕の説を誠と信じ正義の旁々を悪ミや思ふ心とり政男どのを加留の浦にて打ゆやくしト(お涙)も殿の心を色香を以て惑わさんとせしも伯父上のれ詞を信じトいろ〳〵諫むれども一心鉄石の如き主水聞入れず君家尽を忠義の心ト言此所へ禎藏出來り也家老の命を請政一女房並ミ姉に近附生捕らんと存せ之所女ミ似合ぬ適れなる手練一人は生捕一人は首になさ也實儉に入れるト首桶を出を件より(主水)盗を取ればれ岸にあらで軍司が首に驚ク事いろ〳〵有て禎藏此程より一味ト見せしハ奸黨原の機密を探らん爲隨身ゐせしといふに主水南無三ト刀を扳掛れを止めて(禎藏)ヤア只今是へ參りしは私ならぬ我君の上使ゐれぞト主水の密謀機密を明せし事を逃殿より下されし和歌ミて隱謀有事は判然致し有ると序幕の短冊を出し見せる主水取て〇野に山に林ミへだつ水はあれど汲もやまずば本や知れなん此讃歌が如何致した(禎藏)其和歌の心は上邊より見れ時も草を分ても詮義せよ也の仰には似たれども其也心を汲ねば彼の濁れ江ゼ野に山ミ林なんゑにへだてられ一目見ては原の濁れか澄めるか知るゝならんと一首の和歌ミお心を能られしは今里村の盗賊を名どし罪なき正義の徒ミ罪を負さん工み有んや我君が遠く慮かりし也賢慮なるぞト是とり反問苦肉の計寄にて汝が奸悪を知りし上は最早逃れぬ伏罪致せ此時敬政立出主水の手立と知つゝお澤の色ミれば且ハ両派の無事に治まらん事を計り心を碎く其折柄私の宿意を以て正義の者の非業の最期を遂させしは如何ミも殘念至極といろ〳〵臺詞有て主水いつかな罪に伏する事なく多久見等を討しは曲瀬軍太夫等を暗殺なせし大科人故と爭ふ所へ廉平れ涙出來りイヤ其科人は生田主水心に覺へ有ふ(主水)ヤア見れば下郎の廉平トいゝお涙まで其体は(廉平)ヤア下郎とは舌長なり我は天下の涙人安積廉之助トいへる者我素性を押包み生田の屋敷へ住込しハ正義黨の犬にしてト始めよりの次第を悪く言件有て是ミても伏罪致さぬかサアサアサアト皆々操上に成るト(主水)此上はそれト服へ刀を突立る(敬政)主水には改心なして自段なせしゆ(主水)チイヤ改心は仕らぬ帯せし刀は德川三百年來の恩ろ報也る我所存早首打れよ中田禎藏(禎藏)チゝいさぎよさ其言葉いゝゑも介借(敬政)ヲゝ予が言葉にそむ之反對黨の巨魁主水(禎藏)其他黨派ろ藩士殘らず(廉之助)御下知ミ隨ゐ亡る上は(涙)一藩こぞつて皆々朝家ろお味方(廉)其軍人の血祭つゑ(敬)不便ならがも(主水)イザ首打れよ(禎)いふゑや及ぶト主水ミ引廻を禎藏刀をさし附る敬政立上る双方一時の木ろ頭(敬政)ヲゝ祝せ〳〵ト此もやうよろしく太鼓諸ゑてひやうし幕

切狂言大坂紳士三様

序幕　梅田停車場前の場　此所大阪梅田停車場前茶店の体躰砲の聲本鉄砲の音霧壁一面白烟にて幕明く爰に仕出し大勢天子様はモウれ通りに成升たゆアイたつた今れ通り被成たト御休憩にならなんだ筋を註ては入跡へ秋の長介子役長吉の手を取り出來るト一所ミ吉田三郎羽織着流しゑて(吉田)どうしやゐどく痛むこな(長助)ハイ余程痛みゑ致し升れど是も時の災難で致し方がムり升ぬト始終車に足を敷れし思入爰へ上手より蘇妓おさぬ男衆鶴吉一寸酒の廻りし思入ミて長介ミ當る事有をおさぬ詫れ件より登く鶴吉が怪我をさせしゑはあらず先に車に敷れしト云顔



ゑ見てヲゝれ前さんはお菊さんのおとつさんでムり升せぬかト是より吉田ハ茶店へ連行アルコールミて疵を洗わず事有て見すしらずの私をこうやうにお世話下され升る段誠ミ難有存升ると廉直なる親仁のゆいさつして禮をいふ件有る爰へ藤野車夫を連來り此車夫を追かけ連歸りしといふて長介へ詫サス事有而客人は逃て行かムとをるを引留め見れは奉迎者と見へ禮帽に白菊乃造り花をさした紳士らしき人故段々ヤメ込で遣た所が平謝りに謝りし故吃度いましめて置て遣つたが車夫ミ後來の爲也思ッテ連て歸り詫さす積りヲヤと言件有て夫れより車夫を歸し遣り皆々自由亭にて夕飯にしやうとアルコールの價を吉田は拂ひ藤野は此仁はどこの者ダト尋ると、れ芳、是はれ馴染のれ菊さんのれとつさんでムり升花井アノ新地の大西の(芳)ハイそうでムり升ると此一統は入跡へお菊出來て怪我はどんな事ヲヤと尋ねる件より一寸親子不運な思入有て此道具返しとなる

中の幅自由亭の場　都而自由亭表面の造り物にて吉田を始じめ藤野花井等いろ〳〵別會乃反對説を唱へる件有ミは入跡へ岩崎車夫と來りさい前はひどい目ゑ逢たと両人捨せりふゑて出お菊が來たかと尋ねまた來ずば梅田の常村屋ゑ居るのであろふと内へは入直ぐに出來り二階はさし合が有ると最前はり込れし吉田を始め花井等が居るといふ事を車夫ゑも聞し座敷をかるさす件

在て是とり岩崎はれ菊を周旋して呉と頼む事在て返し
同自由亭奥座敷の体　愛へれ菊は吉田へ親の怪我を厄介へなり
し禮をくどく云件在て吉田は洋行戍して歸朝の後を官途にも就
すす者迎をして居るトいふ姿にて皆々が奉迎の準備をなす會議
を聞縁門ダノフロックコートだろト騒ぐ笑みを含み論破せる件
より有志者を募る事を新聞へて廣告スル抔いろ〳〵議論を聞吉
田も何れも馬鹿氣ダ事ジヤと取合わぬ思入にて爰を引取外へ出
るトタソ二階とりお菊は一寸見とれる件有て岩崎ハ両人のそ振
りを怒る是へてお菊はコップのビールを岩崎の肩へあふせるを
最前私しのおとつさんに怪我をさしたも麁粗で仕たといわしや
んしたでムンせぬかそうすれば是れも麁粗で仕たのでムンス御
めんをといふ岩崎は濡て氣味の悪さ思入吉田も笑おながら向へ
行のが木の頭よろしく幕
中幕　高麗橋筋道路の場　爰へ屋根看板をおろも家又は明き家
を板圍おもを便所を取除おを見苦おさ軒先も圍戍なも抔大こん雑
の所へ行幸啓へ延引なりしといふ件有て道具廻る
吉田三郎寓居の場　北濱吉田寓居の体へて爰へ藤野出來て奉迎
有志世話掛ト云者が出て咄々怪事をヤラカスハ賀ア驚ダそれ
ナイこと夫より行幸の道筋の明家貸家札をめくり板圍をなし又
ハ職工の見苦おさ場所は目ざわりへならぬ圍は聖上を欺き奉
た譯だも大不平の議論を述べ又奉迎有志者の廣告中に遊娼妓を
除くも有はドウいふ考へだらふといろ〳〵不平を並べたヘ、踊
へる是れを舞踏の鳴物に成り吉田も此大坂は日本第二の都會と
はいへ商業上とり見れば我國第一の地りして實に府下百五十餘
万人の精心といふ物は腐敗して有る者斗りにて氣の毒千万ジヤ
といふ件有て是より花井方へ行所やはり踏舞の鳴物もへ思入有
て歌羅巴の文明を唱へどんな事でも西洋事ならイヽもして其も
ね戍もおのも困ッた者だ夫も淑女合鑑が學ぶも交際上必要なれ
ば害もなくヨシ男子でも若年へて學問なり商業なり一己獨立し
て充分り生活を爲事の出來る上はさし問へもないが天窓のばけ
かよつた親仁が己の娘と一所に舞踏の稽古をすおとは一体ドウ
云ふ考へダロウ是も一時の流行物トは云ながら馬鹿の底が知れ
ないナトとろしく道具返ス
秋野長介内の場　都而貧苦の幕おの体にて駄菓子わらんじ荒物
等を商ふ小店りて女房れ傘縫仕事して居る上ハ「浪花潟短かゝ
芦の束の間も手足休おぬ賃仕事町小使の看板も昔床しき御家流
われとい秋の長助も四十の上を七ッ八ッもおわへさへも元の
身の影だにもなき小商ひ暮おもおさく菓子よりもおはもつおく
ど見へにけると茲へ子役長吉學校より戻り泣いて居るも外の友
達が皆先生より洋服でなければ奉迎へも行れぬといふてジヤす
私しは洋服がないゆへ遊んで呉れぬといろ〳〵洋服をせがむ件
有てトいれ倉はとゝさんが仕てやおをいふてジヤもへ奥へ行て
問ふをさやれとそかを遣る跡夫婦が今の身の上へて羅紗の洋服
の五圓も六圓もふる金もどこに有ふぞと是れも此親が甲斐性
がない故一人の娘は人に賤おらおを遊妓となし今又一人弟の洋
服さへも出來ぬといなさけない身では有ヂイのぬ是れも學問を
さふねば後來爲も事の出來ぬと思ふ親心トいろ〳〵愁おの思入
此前とり吉田三郎門口りを駕とやうもを聞濟しお前のお内は茲
で有たかと覗く（長助）チヽなたは此間ステーションへてお世
話になりし旦那様ト是とりいろ〳〵有て内へ通し茶を出も事抔
有て吉田は駄菓子を取り其代價として金六圓やおを件にて菓子の
價ろ多ければ跡りて子供ろ洋服をして遣れといふ夫デはさい前
うらろ事柄を（吉田）一伍一什聞升たト茲へお菊戻り折角の御深
切項戴致し升おと金を請其かわり先日のアルコール代を御返却
致も升ると是れも金六圓持歸り弟ろ洋服へ爲積の金を返も件有
て夫より賤しい勤の藝者とて此大坂に住ながら天子様の奉迎も
叶わぬ今日ろ廣告から皆一同が不平を戍鳴らし常村屋へ集會し
て思ふ所を手紙へ認め宛は商法會議所の奉迎有志世話掛りへ使
に持して遣たれど其返事戍せぬ事は元より知れて有なれど所詮
私しも天子様を奉迎するは出來ない身ろ上殊に聞けば弟の長吉
が學校では羅紗の洋服を着て行ねば是も奉迎が叶わぬとの將を
聞た私しの悲しさ責て此身は叫わずも弟だけは人らしう天子
様か拜ましたいと出來ぬながら洋服のお金を調らへ來て見れば
れ前が怪我を仕た時ろ御深切と言ひ今日のお情け其節ろ思召を
聞けば聞程有難うて私しや今迄れもつさん門ろ泣て居たもいナ
ア（吉田）ムヽ面白取るべき金ではなけれども氣性ろ惚れて此金
は（菊）れ納被成て下さり升るか（吉田）シテ商法會議所へ遣わし
たといふ其手紙は（菊）趣意は茲ろ卿稿なから（吉田）取て讀○手
紙の大畧を記し置升○私共は賤しき業ろはいへども國税の一
分をも納やい皇國の民へして聖上皇后宮は恐れ多くも父母と仰
ぎ奉る三千八百万の數の内を存い所廣告文中へ奉迎者の内藝娼
妓を除くと有るは何れの点より出し事や賤しき業を爲といふ点
ならば猶更大君ろも皇后宮へも其身のはかなきを憐み給ひこそ
したまふれいかで是を除きイナ退け玉わんや愚なる身ろは其
もへよしを判ずる事へ迷ひいまゝ呉〳〵も其委敷義をお論し下
されたいと云長〳〵とせし文章にて吉田は是を讀終り中々文章
を云も卿稿なから手跡の美事ハ誰が綴たれだへ（菊）ムイアノ夫
は（吉田）ユヽ夫でもお前が此文をヲ感心な者だなアトれ菊も
吉田の氣性と人物とへ惚る件又吉田もれ菊の文才の有る所と其
氣風の高尚なれ所に惚れ事抔有送り出て件にてよろし返し

當村ゑ座敷の場　造り物都而ステーション前　常村屋乃座敷の体
よて商法會議の奉迎掛りの岩崎始大勢酒よ酔居る所へ花光お菊
おきぬ抔出来り此程より度々催促いたせども御返事のおいは如
何と奉迎の内藤娼妓を除くの事をかわる〳〵責める件よて終よ
皆々を恥しめる事有而いかなる鈍面皮の客人も其内心と行を慎
妓どもにわばかれコッ〳〵逃て仕は入故跡皆々一杯飲なはそふと
立上るのがおやうし幕
大切商法會議所の場　爰は都而大坂商法會議所の体にて爰へ目
鏡の亀吉藤妓一統の返事を聞に来て居る所にて會議所の奉迎掛
ば皆々事を左右よ托しも早奉迎も六日の菖蒲十日の菊ジャマア
後より返事スルト云へゞ是ゑ皆々催行社の宴會へ行件にて返し
催行社宴會能舞臺の場　都而能舞臺の掛りにて狂言ハ二人椅よ
て知らせに隠鏡板を打返す爰に長歌道中並び姿八景の石橋の唄
に成り龍がゝりの石橋にて此道具居所返しに成ル
舞臺ゴ　西洋館造り催行社の本遠見日の丸の提灯数多杉なりて
空へ引あげ都て桃色の体よて爰へ長助長吉おきぬ出来る藤野見
てヤア見れば おき様に紋附どふか催行社の招待を受たやう
な珍だが（きぬ）・イ是でも奉迎有志者の一人ですもへ（藤野）ナ
ニ其方の成も沒名の廣告だが（きぬ）ヤア夫もへおとゝひ鑑札を
返上致せ長助（今では如何に御上様い懸りおきぬさん（藤野）ソリ
ヤひどい事をしたな爰へ吉田三郎禮帽洋服にてれ翠鬼鳥の白羽
をさしたる女帽黒の洋服よて吉田と手を引出来る（花井）見てイ
ロッ何所の貴婦人かと思つたられ菊れきぬう是ハ　たねしか
し今日は藤妓はイケない筈だが（吉田）花井君三日見ぬ間の櫻か
なを忘れたかヲ（花井）そんならモシヤ二人の者は（二人）ハイ鑑
札返上致せし上（菊）吉田さんヲ（きぬ）御令閨サンデムンをわい
ナア（花光）岩崎さん其鑑札返上は爰にも一人有升わいナアト是
も洋服にて出来り手紙のれ返事は詰りわろふせはそんと升せぬ
故三人は落胆なし今日の奉迎も御着荷の間に合ねば悔んで返ら
ぬ事と思ゑ大坂よ住む女乃数に帰りながら入升た（お菊）藤者の
お菊も今日のれ菊も同じれ菊ろれよ奉迎の出来るはどふいふ譯
で有り升ふ（三人）よつぽど奇妙な廣告で腹が立やられかたいや
ら（吉田）ろれも成るべく藤妓の如き賤しい業をばせぬやうにと
（長助）置見の爲廣告と　花井）思へば腹も立ナイ譯サ（女三人）大
きよれ世話れ茶でゐがれ（吉田）明はゞ目出度い皆々今日の祝宴
（花光）聖壽萬歳（皆々）萬々歳ト此所へ頂取出東西先ヅ今日と是
れ切りと目出度打出し

明治廿一年二月十八日御届
同　年二月十八日出版
大阪府平民
著作人　竹柴蔵
西成郡西高津村六百八十九番屋敷
大阪府平民
発行人　小野豊治郎
南区西横町十三番地

定價十五錢

特67
409

074872−000−0

特67−409

浪花座演劇場新狂言筋書

竹柴　諺蔵／著

M21
CEK−0285